

---

# ゼロの使い魔の世界に行って来て

短剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔の世界に行って来て

### 【Nコード】

N3377V

### 【作者名】

短剣

### 【あらすじ】

ゼロの使い魔の世界に転生させるために殺された主人公。チートな能力を貰い、転生した彼に待ち受ける運命とは！？

## プロローグ

「んで、どうして俺は此処に居るんだ？」

「それはあなたに行つてほしい世界があるからです。」

「その世界のだれかの手助けをしろつて事か？」

「そうです。」

「断る。戻せ。」

「無理です。あなたの肉体は粉々になつたので戻せません。」

「ちつ、行く世界は何処だ？」

「ゼロの使い魔です。そこで、平賀才人と一緒にルイズの使い魔になつてください。」

「転生の特典は？」

「いくつでも。」

「1つ目Fateの無限の剣製、2つ目記憶を持ったまま転生すること、3つ目一度<sup>トレース</sup>投影した物はそのまま使えるようにすること、4つ目ボンゴリング全部、5つ目時雨蒼燕流を使えるようにすること、6つ目原作より前に転生して、ルイズと関わりを持てるようにすることだな。」

「全部叶えられるけど、ボックスはいらないの？」

「そうだな、やっぱり一度投影した物を保存するボックスをくれ。」

「それじゃあ送るけどいい？」

「ああ。」

「それじゃあ頑張つて来てね。」

## 1話

「あばばぶぶぶぶう。《どうしてこうなった》  
確かに転生することは了承したよ？」

だからって赤ん坊からやり直させなくてもいいだろ！！

「ふぎゃ、ふぎゃ、ふぎゃやややあぁぁー《あの疫病神め、怨んでやる》！！！」

はっ！今の足音は・・・しまった、大声を出したせいで地獄を見る羽目になってしまっ。どこか隠れる場所は・・・あった。ベッドの下だ！

「レイ、大丈夫よ。義姉ちゃんがついてる・・・レイ？何処にいるの？」

心配させてるから罪悪感はあるが、地獄を見ないためだ。義姉ちゃんには悪いが、このまま隠れて・・・

「グウー。」

っ、しまった！

「レイ何処にいるのかな？」

義姉ちゃんがドアの鍵を閉めて部屋の中を探し始めた。

「此処にも居ない。後探してないのは・・・」  
あっもうばれた。

「ってベッドの下になんかいる訳無いか。」

ばれなかった。後は義姉ちゃんが出て行くのを待つだけ・・・

「せっかく父上に内緒で離乳食あげようと思ったのにな。」

うぐっ！食べたいけどこんなあらかさまな罠に引っかかるもんか・・・

「もったいないけど捨てよう。」

「ばぶう。」

しょうがない。せっかく義姉ちゃんが離乳食をくれるんだから我慢しようと思いい、ベッドの下から出ると、

「レイ、見つけ」

義姉ちゃんに抱っこされ、

「ほら、レイ、ご飯だよ。」

義姉ちゃんを見ると、悪戯が成功した子供みたいな顔をしてソレを目の前に差し出してきた。

「あばばばー!!」

は、嵌められた! くっ! こうなったら

「あっくらレイ、逃げるな。」

こっちには『羞恥』という感情があるんだ! 逃げるに決まってるじゃ無いか・・・ってあれ?

「ふっふふ。こんなこともあるつかと鍵を開けられないようにして良かった。」

「ぶっ。」

「レイ、今のうちなら許してあげるよ? それでも拒むんだったら・・・」

っ! しょうがない、母さんに報告されるよりはマシだ。

「やっとおとなしくなった。ほら、ご飯だよ。」

仕返しとして、甘噛みしたら、

「っ! レイ!!」

怒らせちゃったか。まあいいや。

「レイ、お風呂に入ろうね。」

はっ? それって・・・

「フルフル(泣)」

「そんなに入りたくないなら早く行こうか。」

ちよ、ちが・・・ああ!!

## 2話

「ねえ義姉ちゃん、そろそろ外に出してくれてもいいんじゃないの？」

「っ！？許可されてないから駄目！」

「ふん。」

「今日からレイは離乳食だから準備してくるね。」

「行ってらっしゃい。」

「やっとな離乳食を食べれる。・・・けど、」

「んん・・・やっぱり何か隠してるよな。」

俺の教育方針は俺の両親から指示があると考えて間違いないだろう。

問題は俺の両親がどうい理由で俺を外に出すのを禁止しているのか。

「一番分かりやすいのは義姉ちゃんに聞くことだな。」

「ただいま。」

「ねえ義姉ちゃん、出来れば逸らさずに答えてほしいことがあるんだけど・・・。」

「っ！・・・せつかく隠してたのに無駄になっちゃった。」

「やっぱり隠してたんだ。」

「もう隠しても意味ないから言うけど、レイはガリアの王族の息子で、人間と吸血鬼のハーフで妾の子だから隠してたの。」

「・・・。」

「レイの存在を隠すことにした時私は反対できたのにしなかった。

つまりレイのことを全く考えてない最低な人なの。」

「・・・義姉ちゃんこっち来て。」

「何？」

レイに近づくと、

衝撃。

何を受けたか考える間もなく、意識を刈り取られた。

### 3話

何だよ、それ・・・義姉ちゃんは最低な人なんかじゃない。俺をしつかり育ててくれたじゃないか。

だから、

「義姉ちゃんこっち来て。」

何で出来たのかは分からなかったけど、魔力の塊を生産、それを義姉ちゃんにぶつけた。

どんつという鈍い音がして吹っ飛ばされ、崩れ落ちた。

「何でそんなこと言うんだよ・・・」

義姉ちゃんの服を脱がして外相が無いか確認する。うん、外傷なし。うまく意識だけもっていけたようだ。

義姉ちゃんを用意してくれた離乳食を食べながら思考をめぐらす。

俺が人間と吸血鬼のハーフって事を隠してたのは都合が悪いからだよな？それより、ガリアの王族の息子ってルイズと関わり持てないじゃないか。

話題閑休。

後で、あの疫病神を呼んで確認すればいいか。

それにしても義姉ちゃんがまだ起きない。息はしてるから大丈夫だと思っけど・・・

心配になったから、胸の上にとび乗ってみる。

…ぷにぷににしてて柔らかくて温かいものに埋もれて至福のひと時。

二歳だから出来る特権だね！

「ぎゅむっ!？」

あっ、起きた。

「・・・?」

「おはよう。」

「何したの?」

「何でできたのかは分からないけど、魔力の塊を生産して、それをぶつけた。」

「何それ・・・」

「それより、『最低な人』とか本気で言う?俺は義姉ちゃんに育てられたんだからそんな事も言うな。」

「・・・そうだね、ごめん。」

そういえば、レイが自分から私の胸にくっついてきたのは今日が初めてな気がする。授乳の時もお風呂のときも、いろんな方法で逃げ回っているのを無理矢理捕まえていたはずだし。(捕まえた仕返しなのか、いじってきたけど・・・)

静かに腕を持ち上げ、胸に半分埋もれているレイをそっと抱きしめる。

「っ!?!?」

「お願い。今日だけでいいから、逃げないで。…このまま寝かせて。」

「

…裸で寝ると風邪引くよ?」

「レイが温かいから大丈夫。」

本当に温かい。体の芯から温まってくる。

…もっと早く抱きしめておくんだった。

「そうだ、明日から私の事義姉ちゃんって呼ばないでお母さんって呼んでほしいな。」

「・・・じゃあ代わりに魔法教えて。」

「分かった。おやすみ、レイ。」

「おやすみ、お母さん。」

## 4話

「んっ。」

「レイ、おはよう。」

「おはよう、母さん。」

「……おは？」

「恥ずかしいからいやだ。」

「……ぷっ！あはははは！いいよ、母さんでも！あははは！」

「むー。」

「それじゃあ、魔法の練習しようか。」

「お願いします！」

「じゃあまず、レイに魔力を流すからそれを感じ取って。」

「分かった。」

「行くよ。」

「っ！」

母さんが魔力を流した瞬間、体中に激痛が走り、気を失った。

「ここは……」

「そつ。君が転生する前に来た場所だよ。」

「あつ、おい！ガリアの王族の息子ってルイズと関わりが持てないだろ！」

「しょうがないじゃない。上級神や最上級神に関わりが持てる人物に転生させることに反対したんだから。」

「それならいいや。それで、俺は何で気絶したわけ？」

「魔法の四大系統は分かるよね？」

「ああ。『火』『水』『土』『風』の4つでルイズの『虚無』を合わせて5つだろ？」

「そう。だけど、あなたのはどれでもないわ。」

「はっ？魔法は使えないのか？」

「使えるんだけど……」

「何？」

「あなたの系統は『闇』なの。」

「それで？」

「闇は他の系統とは絶対に混じり合わない。」

「拒絶反応で気絶したって事か。」

「そういう事。それと、ボックスは無理だったから投影したものは残るようにしといたから。」

「分かった。」

「それじゃあ、バイバイ。」

「レイ！大丈夫!？」

「大丈夫。」

「急に気絶するから吃驚した。」

「心配かけてごめん。でも感覚は分かったから。」

「そう。」

「多分こんな感じに出せば……」

自分の周りに闇が浮かぶイメージをし、魔法を使つと、

「やっぱりこうなるのか……」

イメージどおり、俺の周りを闇が浮かんでいる。

「レイこれって……」

「俺だけしか使えないと思う。」

「他には何かできないの？」

「うん。イメージすればできると思う。」

周りの闇を衣服としてイメージすると、

「出来た。」

闇が衣服に変化して着ていた。

「レイ、多用しちゃ駄目だよ。」

「分かってる。それじゃあもう一つ練習しますか。」

「もう一つ?」

「母さんは下がってて。」

母さんが下がったのを確認してから、

「トレースオン 投影、開始。」

「ロールアウト バレット・クリア  
工程完了。全投影待機」

頭上に27の剣軍が現れる

「フリーズアウト ソードバレル・フルオープン  
停止解凍。全投影連続層写」

27の剣軍が壁に向かって降り注ぐ

「レイ、何する気?」

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想!!!」

27の剣が一斉に爆発し、壁が木っ端微塵になった

「レイ!こんなことしたら・・・」

「今の音は何だ!」

「父上、レイが魔法の練習をしてたら・・・」

「レイ、何をしたのか分かってるのか!」

「黙れ。」

「っ!」

「隠し子だから隠すのは分かるけど、軟禁までしてて父親ぶるんじやねえ!」

「へえ。隠し子がいたなんてね。」

「知らなかったな。」

「!」

ドアには青髪の男性2人が居た。・・・青髪  
ジョセフとシャルルだな。

めんどくさくなりそうだな。

## 5話

「これからどうなるの？」

母さんに聞こうと思っただが邪魔者が居るときは呼ばない方が良かったらう。

母さんもそれを分かっているみたいで、

「レイの存在を公表するんじゃない？」

「ほう、もう自分の立場を理解してるのか」

「頭の良い子なんですね」

兄2人がしゃがんで目線を合わせてきた

・・・あー、なんだろ？

この2人

「・・・こわい」

「なっ！」

「えっ？」

俺はそれだけ言うと、走って母さんの後ろに隠れた。

母さんの服の裾を引っ張ると、

「それじゃあ私たちはこれで。」

俺の意図に気付き、部屋から連れ出してくれた。

嫌な予感がするから、あまり会わないようにしよう

それから3年が過ぎて5歳になった  
俺がジョセフとシャルルに会った翌日には公表された  
ジョセフ派・シャルル派が一時騒いだみたいだが、妾の子の肩書  
が思いのほか強くて『跡取りの可能性はない』って結論が出た  
みたいだ  
俺も興味がなかったから良かったよ

ジョセフとシャルルが会いに来たときは寝たふりをして会わないよ  
うにした。

コンコン

「どうぞ?」

「久しぶりだな。」

「ちっ、何か用か?」

「お前をトリステインに連れて行く事になった。ガリア王家の為に  
働いてもらうぞ」

「知らん。俺には関係ない話だ。」

「そういつわけにもいかん。今のところ、トリステイン国だけ跡継  
ぎがないからな。妾の子とは言え王家の血を受け継ぎ、トリステ  
イン王の娘のアンリエッタ姫と歳が近いから目を付けられたのだろ  
う」

「ちっ、分かったよ。行けば良いんだろ、行けば!」

「また後で迎えに来る。それまでに準備をしとけ。」

## 6話

「レイ、本当に行くの?」

「行くけど、望みどおりには動かないよ。」

「それって・・・」

「トリステインには行くけど、何もしない。」

なんでわざわざ幼馴染を戦争中の国に送るような奴と結婚しないと  
いけないんだ?

「ちよつと待つてて。」

母さんが何か手紙を書き、それを俺に渡した。

「これをヴァリエール公爵に見せれば何とかなる筈です。」

「ありがとう。じゃあ行ってくるね・・・お母さん。」

「レイ・・・」

「準備はいいか?」

「ああ。」

「じゃあ行くぞ。」

両用艦に乗り、トリステインに向けて出発した。

「レイ、起きろ。」

「起きてるよ。」

「着いたぞ。」

「じゃあ帰れ。後は俺だけでいい。」

「じゃあな。」

「とつとと帰れ！」

城中に少人数の護衛だけを連れて謁見の間に向かう。

謁見の間に入り、自己紹介などし、本題に入ったので、

「そのことですが・・・断らせていただきたい。」

「なっ！」

「では私はこれで。」

護衛を引き連れて出ていく。

「あゝ。疲れた。」

「疲れる要素は無かったでしょう・・・」

「話聞くだけで疲れた。」

「それじゃあ私達はこれで。」

「ああ。義姉ちゃんに心配するなって伝えといてくれ。」

「分かりました。」

(おい疫病神聞こえるか。)

(その呼び方は無いんじゃない?)

(煩い。それより、ヴァリエール公爵家の位置を教えろ。)

(はいはい。ここから……)

## 7話

「此処か。」

（そう。それと、その影から見てるわよ？）

（気付いてるよ。）

「じゃあ行くか。」

ヴァリエール公爵家に近づくと、

「誰？」

影からこつちを見ていたルイズが話しかけてきた。

「ヴァリエール公爵に用事があるんだけどご在宅かな？」

母さんから預かった手紙を渡す。

「待ってて。」

そう言つて家の中に入っていった。

10分後

家から出てきたルイズが

「入っていいで。」

そう言つたので、中に入るとヴァリエール公爵が待っていた。

「君がレイ君か。」

「はい。」

「手紙に書いてあったことなんだが、それを許可するのに頼みたいことがある。」

「何でしょうか？」

「娘を治療してほしい。」

うん。水のメイジではないって事は知ってるんだよな？

「ヴァリエール公爵、これから話すことはあまり聞かせたく無いのですが・・・」

「ルイズ、外で待ってなさい。」

「はい。」

ルイズが外に出たのを確認し、

「残念ながら私は水のメイジではありません。それどころか系統に目覚めてもいません。」

「そ、それは大変失礼を」

知らなかったのか。

「ただ、方法なら分かります。」

「どうすればいい?」

「濃度の高い水の精霊の身体の一部を貰うのが良いかと。」

「そうか。」

「しかし、今すぐに必要ではないので、とりあえずはメイジの処方したポーションを治療に使うのはやめてもらいたい。」

「なっ!」

「おそらく娘さんの病は水の循環がおかしいことだと思います。」

そこから俺は原因を説明した。

「・・・ということではメイジの処方したポーションを使うのをやめてもらいたいです。」

「分かった。それで、手紙の内容だが、家に来るか?」

「それって・・・」

「養子になるか?」

「お願いします。」

## 8話

ヴァリエール公爵の養子になってから10年が立ち、俺が13歳、ルイズが16歳になったからルイズはトリステイン魔法学院に入学しているだろう。

1年前から『レコン・キスタ』、『ガリア』、『ロマリア』との戦いの準備のため、傭兵としてギルドや王都からの数々の依頼を遂行し、成功させてきた。

「ルイズ姉、元気でやってるかな・・・」

養子になった翌日から俺はルイズに振り回され、呼び方も強制された。最初は無視してたが、ルイズが偶々いたエレオノールさんにつげぐちしたらしく、エレオノールさんが俺を呼び出し、肉体言語で無理矢理呼ばせるようにした。そのせいで、トラウマになり、1週間立ち直れなかった。

「っと、さっさと仕事を終わらせるか。」

今回の仕事は異常発生したオーク鬼の駆除だ。まあ何度も戦ってるから遅れをとると思わないけど。

「あれか。」

10m先にオーク鬼の群れが居た。

「10匹か。こいつらでラストだな。」

自分の影から闇を出し、気付かれない様に近づける。群れの足元に闇が着いたので、魔力を流して串刺しにした。

ぶぎい！ぶぎい！んぐいいいいいっ！

「さてと、かゝみゝさゝまゝ！」

（何？）

（瞬間移動しようだい。）

（能力ひとつ捨てないと無理。）

（じゃあ時雨蒼燕流使えなくして。）

（OK。知ってる人がいない場所には行けないからね。）

(分かってる。)

(じゃバイバイ。)

「それじゃあ完了の報告をして帰りますか!」

## 9話

「は。」

「レイ、どうしたの？」

「カトレア姉さんの病気は治ったでしょ？でもルイズ姉が心配だから。」

「レイは優しいわね。」

「そうかな？」

神様に瞬間移動を貰った後、報告をし、ラグドリアン湖で水の精霊から体の一部を貰ったので、カトレア姉さんの病気は治ったが、ルイズは学院で魔法を失敗させて爆発を起こしてるだろうからはやく使い魔召喚してほしいんだが・・・

「せっかくの休暇だし、楽しむか。」

それに後少して使い魔召喚も始めるだろ。

「カトレア姉さんありがとう。気が楽になった。」

「どういたしまして。」

「！外に行ってくるね。」

「どうかしたの？」

「何でもない。じゃあね。」

ルイズまだ召喚すんなよ。

大急ぎで外に出て人目につかない場所に着くと、

「間に合ったか・・・」

目の前に召喚のためのそれが浮かび上がる。

「やっとか。」

黒色のローブを着て触れる。

そのまま右腕から飲み込まれていく。

「うっわ煙で何も見えねえ。」  
「やっぱり、ルイズの系統は虚無か。俺と才人が召喚された筈なんだが・・・足元に居るな。」

「才人はほっといつて・・・煙が晴れてきたな。」

煙が晴れて見えたのはルイズ姉が近づいてくるところだった。

「あんだ誰？」

「再開した人との第一声がそれかよ・・・」

あっ、ローブで顔が見えてないから当然か。

「もしかして・・・」

「そっ。久しぶり、ルイズ姉。」

ローブを脱ぎ顔を見せると、

「レイ！」

満面の笑みで抱き付いてきた。

## 10話

「つと！」

「そういえばレイは学院になにか用があったの？」

「はっ？」

「えっ？」

「こちらには仕事で来たんじゃないの？」

「そういう事か。」

「違っぞ。」

「ぐ、軍は！？」

「軍に入るつもりは無い。それと、俺を此処に呼んだのルイズ姉だよ？」

「えっ？レイが使い魔なの？」

「そこに倒れてるやつもな。」

地面に倒れている才人を指す。

「多分そろそろ起きるだろうから行って来い。」

「φ、φ£%#&？」

「こ、ここ…は？…はっ？」

「&#%£φ!？」

「わ、わからねえ…」

「&#%£φ?!！」

「此処どこだよ！？つーか何言ってるかわかんねえつの！」

「φ£%#!&#%£φ!！φ£%#&#%£φ!！」

「たくルイズ姉に任せると、駄目だな。」

「φ£%#&」

「φ£%&#%£…」

「なっ何だ？」  
「戸惑ってるな。」

『自己紹介でもしようか。俺はレイ。レイ・リチャード・ド・ウインター・ド・ラ・ヴァリエール。レイって呼んでくれればいい。』

『……』  
『……おい』

才人の顔の前でヒラヒラと手を振る。

『はっ！ああつと、おおれは！俺は才人！平賀才人！』

『才人って呼ばせてもらうな。』

『お、おう』

『そう何度も首を振るなよ。』

『俺の言葉がわかるのか？』

『この世界じゃ俺しか分からないだろうな。』

『それじゃあ日本って知ってるか？』

『それも俺しか分から無いだろうな。』

『レイは何で知ってるんだ？』

『今説明するのは二度手間になるから他に聞きたいこと無いのか？』

才人は顎に手を当てて考え込む素振りをする。寧ろ聞きたいことが山ほどあるために整理しているようだ。

その合間を縫うようにレイの背に声がかけられる。

「レイその平民と何を話しているの？」

「んっ？自己紹介してたところだが？」

周りを見渡せば、この場にいる全ての人間の目はレンと才人に向けられていた。

レンは溜め息をつくくと、

「ルイズ姉、先生にほかの生徒は帰らすように言ってくれ。」

「分かったわ。」

『さてと聞く内容は決まったか？』

『と、取り敢えず此処は何処……ってえ！！と、飛んでる！ひ、人が飛んでる！！』

せつかく整理した頭の中が一気に弾け飛ぶ才人。

『此処はトリステイン魔法学院ってとこ』

『えっ！人が飛ぶのはスルー？！そこら辺は気にしちゃいけないのか！？』

『まあまあ、一つ一つ片付けていこうな』

そう言つて興奮状態の才人を宥めるレイ。

『あれはフライって魔法だ』

『ま、魔法お？！あれ、そういうえば魔法学院って……』

うーんうーんと、唸る才人にレイは苦笑し順を追つて説明していくことにした。

『大体は今説明した事を覚えてれば問題ない。』

『それで、俺にその使い魔になつて欲しいってわけか。』

『まあそついう事になるな。』

『レイは使い魔いるのか？』

『んにゃ、俺も才人と同じでルイズ姉に召喚された。』

『姉？』

『それも後で話すよ。それでどうする？』

『ん〜、なるよ。』

『ありがとうな。それじゃあルイズ姉呼んでくる。』

レイは才人に背を向けるとルイズの方へ向き会話を交わす。才人はその様子を眺め、若干の期待と大きな不安に小さく息を漏らした。

「はあ〜」

「ルイズ姉はやく契約しなきゃ。」

「順番が・・・」

「才人目閉じてる。」

「えっ？あつ、ああ。」

「これでいい？」

順番は才人が契約をしてから俺だったんだが、ルイズがいやそうだったので、順番を変えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ・・・」

「んっ。次才人と契約だからさっさと済ませていてね。」

「レイ、いつまで目を閉じてればいいんだ？」

「まだ閉じてる。」

「レイ？」

「目閉じてるうちに契約済ませて・・・っ！」

「大丈夫!？」

「ああ。ルーンが刻まれただけだから問題ない。はやく契約して来い。」

「分かったわよ。」

才人との契約も終えて俺たちは学院に戻った。

## 11話

「レイ、何でサイトと話せたの？」

授業が終わり、部屋に戻るとルイズが聞いてきた。

「何でって俺と才人は同じ異世界から来たとしたか説明のしようがない。」

「異世界？」

「そつ。ルイズは日本って国知ってるか？」

「知らないわ。」

「そこが俺とサイトの出身地・・・あつ、俺は元な。」

「レイ、元ってどういうこと？」

「俺も気になったぞ。」

「神様に殺されたからだな。」

「えっ？」

「どうしてだよ。」

「才人と一緒にルイズの使い魔にさせるために。まっ、転生した人物だって思えば良い。」

「そんなニユース無かったぞ。」

「ふむ。俺と才人の出身地の日本は同じで同じじゃ無いつてことか。」

「どういうこと？」

「つまり、俺が住んでいた日本に才人は居なくて、才人が住んでいた日本に俺は居ないってこと。」

絵を書きながら説明すると、

「そういうことね。」

「レイって頭いいんだな。」

2人とも理解できたみたいだ。

「ルイズ使い魔の仕事について説明してくれ。」

「分かったわ。」

そう言うとルイズは使い魔のことについて話し始めた。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「何も見えん。まあ、勝手に人の視界を使われても困るだけだな。」

「はあ、まあそうね。それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。」

「例えば秘薬とかね」

「秘薬の特長とかがわかれば、ある程度は見つけれるだろう。」

「まあ、いいわ。そして、これが一番なんだけど……、」

「使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！」

「ある程度の敵なら倒せる。」

「まあ、敵なんか学院にいればそうそう現れないわ。」

「だから、学院にいる時は、別の仕事をやらせてあげる。洗濯、掃除、その他雑用。」

「「え、メンドクせ。」」

「レイは慣れてるでしょ？」

「自分のだからやってただけだぞ！」

「レイ、お願い。」

「ぐっ。分かったよ、やるよ。」

「レイ!?!」

「もう遅いから寝よう、俺も眠い。」

「そうね。」

「俺とレイはどこで寝ればいいんだ？」

「そういえば決めてなかったな。」

「えっ？」

「・・・ルイズ姉、寢床は藁じゃないよね？」

「いや、あのお・・・」

「才人は家畜じゃないんだぞ？」

「俺家畜扱い?!」

「だって…人間を召喚するなんて思わなかったし…」

「才人は毛布がなくても寝れる？」

「お、おう。」

「じゃあ床で寝ればいいな。」

「レイ？あのお・・・」

「無理。いい加減一人で寝てよ。」

「レイ、泣きそうになってるぞ。」

「あゝもう。明日からならいいから今日は一人で寝て。」

「分かったわ。おやすみ」

「疲れた。」

「レイ、聞かせてもらってもいいか？」

「はっ？ああ、ルイズ姉って呼んでることか。」

「ああ。」

「俺の家名は何だ？」

「ヴァリエール・・・姉弟なんだ。」

「義理だけどな。」

「えっ？」

「養子なんだよね。本当の家族は別にいるよ。」

「さっきの話は？」

「養子になった日から強制で一緒に寝かされたんだよね。」

「大変なんだな…」

「これ以上起きてると明日起きられなくなるからもう寝るな。」  
「ああ。」

## 12話

「才人とルイズ姉はまだ寝てるね。」

二人が寝ている間に顔を洗うためのぬるま湯と、

クローゼットをあさり、着替えの準備をした。準備を終えたので、

未だに寝ているルイズ姉と才人を起こすことにした。

「ルイズ姉、才人朝だよ。起きて」

声をかけると、

「ああ、レイか、おはよう。」

「zzzz」

才人は起きたが、ルイズ姉は起きなかつた。

「才人は昨日の洗濯物洗って来て。その間にルイズ姉起こしとくから。」

「ああ。」

才人に洗濯物を渡し、どうやって起こすか考えていると、

「んっ。」

「おはよう。とりあえずぬるま湯を準備しといたから。」

「ああ、おはよう。レイ、結構気が利くのね。」

「一応弟だからな。外に出とくから服を着替えたら教えてくれ。」

「ええ。」

外に出てすぐ才人が戻ってきたので、2人で待つこと5分、やっとルイズが出てきた。

「遅かったね。」

「これを探してたから遅くなったのよ。」

そっくり、俺に差し出してきたのは仕事で着ていたローブだった。

「ありがと。それじゃ朝食を食べに行くか。」

そう言つて、食堂に行こうとした瞬間にキュルケであろう女の子が出てきた。

「おはよう。ルイズ」

「おはよう。キュルケ」

「知り合いか？」

知っているが知らないふりをし聞くと、

「あら、初めて見る顔ね？私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。

キュルケって呼んでね」

「俺はレイ・リチャード・ド・ウィンター・ド・ラ・ヴァリエール。レイって呼んでくれればいい。こっちが・・・」

「平賀才人だ。」

「レイってあの漆黒のレイ？」

「何だ？それ」

「レイの2つ名よ。黒髪黒目に黒色のローブを着てるから。」

「ふん。」

「それより、レイ、こんなちんちくりんより私のとこにこない？」

「すまないが、主人を変える気はないからキュルケの所には行けないな。」

「レイ・・・」

「どうしても連れて行きたいなら才人を連れて行けばいい。」

「えっ？俺かよ！」

「いいわよ。私の美貌で振り向かせてあげるから」

そう言っただけキュルケは炎のような赤髪をかきあげ、颯爽と去っていった。

「・・・気を取り直して、朝食を食べに行くか。」

### 13話

「無駄に豪華だな。」

「トリスティン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ。」

「じゃあ何を教えてるんだ？」

「『貴族は魔法をもつてしてその精神と成す』のモットーのもと、貴族たるべき教育を、充分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬのよ。」

「へ。」

「本当なら、平民はこの『アルヴィーズの食堂』には一生入れないんだけど、サイトはあたしの使い魔だから、特別よ。感謝してよね。」

「そのことだが、俺と才人は厨房に行つて賄いを分けてもらう。」

「サイトならともかく何でレイまで厨房に行くの？」

「日本はこつちの身分に合わせると、全員平民だからこういった豪華な場所で食事をした経験がなくて、正直、居心地が悪い。」

「そういうことならいいわ。授業が始まる前には戻ってきてよ。」

「んじゃまた後で。」

「コック長！」

「なんだあ？どうしたあ？」

「き、貴族様が！コック長に話があるつてっ！！」

「チツ……またか」

いつもの事だ……。俺達で作ったメシが気に入らねえとか、そういう事でわざわざ厨房まで来ては、グチグチ文句を言ってくる……。全く、貴族つてのは、嫌な生きもんだ。

「あゝ、わかつたわかつた。今行くよ……」

「いや、それには及ばん」

「っ！？」

若いコックの後ろに、黒いローブを着た貴族が……。もうそこにいた。

こいつあ、もしかして……あのミス・ヴァリエールの使い魔になつたとかガキどもが噂してたヤツか……？

声をかけるなり、慌てて駆けて行ってしまった若いコックを追って厨房の奥へ行くと、恰幅の良いオッサンがいた。

この人が、マルトーの親父さんか……。

どうやら、これから朝食だったらしい。こいつはグッドタイミングだったな。

「勝手に入った無礼をお詫びしよう。わざわざ出て来てもらうのも手間だと思つてな」

「あ？あ、ああ……いや、別に構いやしませんがね。」

「実はお願いがあつて来たのだ。」

「な、なんでい……？」

「簡単なことだ。ここの賄いを2人分、分けてもらいたいのだ。」

「なんでまた？」

「細かいことで文句を言う馬鹿貴族と一緒に食べるとつまいもんも不味くなるからな。」

「こいつあ面白え！メイジって言う割に、偉ぶらねえところが、気に入ったぜ！」

「む？そうか？」

「おうよ！そうそう、賄いだったな！すぐによそうから、ちよいと待つてな！」

「才人、賄いを分けてくれるそうだ。」

「良かった。」

その後も、話をする内にすっかり意気投合し、これからは毎食賄いを分けてもらう約束を取り付けた。

朝食を食べた後ルイズと合流し、教室に向かい、席に着く。

俺と才人はルイズの後ろに控えている。

才人と地球で暮らして居た時の話をしてしていると、扉が開き先生が入ってきた。

中年の女の人で、紫のローブに身を包み、帽子をかぶっている。ふくよかな頬が、やさしい雰囲気を漂わせている。たぶん、あの人がシュヴルーズだろう。

彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んで言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズ、

こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなんですよ」

ルイズ姉は・・・俯いてるな。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したものですな。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズが、俺と才人を見てとぼけた声で言うと、教室中がどつと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いていた平民連れてくるなよ」

ルイズは立ち上がり、長い、ブロンドの髪を揺らし、可愛らしく澄んだ声で怒鳴った。

「ちがうわ！きちんと召喚したもの！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろう？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「彼女の召喚は成功した。証拠のルーンを見るか？」

「ちよつと、あんた！」

「平民のくせに君は貴族に対する礼儀を知ら無いのか！」

「ミスタ・マリコルヌ。おやめなさい。」

ミス・シュヴルーズが杖を振ると共に現れた赤土の粘土がびつたりとマリコルヌの口に押し付けられた。

「さて、それでは、授業を始めますよ」

ミセス・シュヴルーズは、こほん、と咳をすると、杖を振った。

すると、机の上に何個かの石ころが現れた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。『土』系統の魔法をこれから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ ミス・ヴァリエール」

「は、はい。ミセス・シュヴルーズ。『火』『水』『風』『土』の四つです！」

その言葉にミセス・シュヴルーズは頷く。

「今は失われた系統魔法である『虚無』を合わせて、

全部で五つの系統があることは、皆さんも知つてのとおりです。

その五つの系統の中で『土』はもつとも重要なポジションを占めていると、

私は考えます。それは、私が『土』系統だから、というわけではありませんよ。」

「『土』系統の魔法は、万物の組成を司る重要な魔法です。この系統が無ければ、金属を作り出すことも、加工することもできません。大きな石を切り出して建物を建てることも出来なければ、農作物の収穫も、今より手間取るでしょう。このように、『土』系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのです」

確かにその通りだが、俺は全部重要だと思つがな。

「今から皆さんには、『土』系統の魔法の基本である『錬金』の魔法を覚えてもらいます。」

一年生の頃にできるようになった人もいるでしょうが、基本を突き詰めていくことも大事です。もう一度おさらいすることに致します」

「真鍮か。」

「ええ、その通りです。私はただの……『トライアングル』クラスですから。」

ギトーもそうだが、ここの教師は自分の系統の自慢が多いな。

「では、だれにやってもらいましょうか……」

シュヴルーズは教室を見回した。

すると俺の隣にいるルイズと目が合ってしまった。

「では、ミス・ヴァリエール。あなたにやってもらいましょう」

「え？ わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらいなさい」  
ルイズは立ち上がらない。困ったようにもじもじするだけだ。

「どうしたんだ？ 行かないのか？」

「ミス・ヴァリエール！ どうしたのですか？」

「先生」

「なんです？」

「やめておいたほうがいいと思いますけど……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケは、きっぱりと言った。教室のほとんど全員が頷いた。

「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いてます。さあ、ミス・ヴァリエール。

気にしないでやってもらいなさい。失敗を恐れては、何もできませんよ？」

「ルイズ。やめて」

キュルケが蒼白な顔で言った。

しかし、ルイズはその言葉に炎がついてしまったのであろう、立ち上がった。

「やります」

そして、緊張した顔で、つかつかと教室の前へと歩いていった。  
隣に立ったシュヴルーズはにっこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

「ミス・シュヴルーズ、少し時間を頂いてもよろしいですか？」

「構いませんが、あなたは？」

「ミス・ヴァリエールの使い魔です。」

「そうですか。」

「被害を受けたくない生徒は俺の後ろに來い。守ってやる。」  
生徒全員が俺の後ろに來たんだが・・・まあいい。闇を壁にしてつと。

「もういいです。」

「それではミス・ヴァリエール。やってください。」

ルイズ姉は短くルーンを唱え杖を振り下ろした。

その瞬間、机ごと石ころは爆発した。

爆風をモロに受け、ルイズ姉とシュヴルーズは黒板に叩きつけられた。

俺は闇を壁にしていたので爆風は受けなかったが、ひびが入っていた。

解除し、闇を戻すと、

「これはさすがに庇えないな。」

机はボロボロ、窓は割れてる、シュヴルーズは気絶しているのに、ルイズ姉は

服は破れて無残な姿になってるのにほぼ無傷。

まあ、教室の片づけの範囲が少なくなっただけマシか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3377v/>

---

ゼロの使い魔の世界に行って来て

2011年11月2日21時45分発行